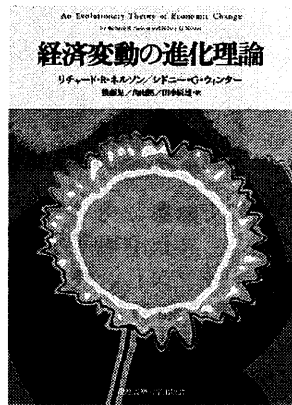
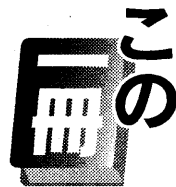


経済変動の進化理論

リチャード・R・ネルソン
シドニー・G・ウィンター 著



(後藤晃・角南篤・田中辰雄訳、慶応義塾大学出版会・五、六〇〇円)
▼ネルソン氏はイェール大社会・政策研究所長などを経てコロンビア大教授。ウィンター氏はペンシルベニア大教授。

この
きほルーティーンによって支配されるが、生存環境の変化や内部矛盾の累積に対しては学習とイノベーションを通じて変態を遂げ、適応していくと見る。見るだけでなく、そのような理論モデルを構築してみせる。

このような進化論的経済学はシュンペーターの経済動学、科学史におけるトマス・クーンのパラダイム論、岩井克人の不均衡動学、国際関係論におけるステイブ・クラスナーのレジーム論にも通じる。この本の影響力からは、さながら十九世紀中葉、ダーウィン、マルサス、マーシャル

生物学の進化論を経済学に応用

ネルソンとウィンターの学問的意図は真摯だ。産業変動や経済成長や歴史そのものは、古い市場・技術・経済体制から新しいそれらへの脱皮の軌跡である。多くの経済学者はそのことを常識として知りながら、教室では伝統的な経済学を講じている。経済学と、現実の経済を見る目の間には、アトとしての洞察力が介在すべきだと思っている。

広げるに至っている。

しかし、この本の著者は違っていた。彼らは動態的な経済現象は、真に動態的なモデルによってとらえられるべきだと考えた。そのような彼らの仕事は、一九八〇年代から注目され始め、今日では専門雑誌が刊行され、日本でも独自の学会が活動を

では、どこが違うのか。伝統的経済学が古典的な物理学や化学をお手本として構築されてきたのに対し、進化理論はその名が示すように生物学の進化論の考え方を経済学に応用しようとする。例えば、新古典派経

済学は、市場を中心に動く経済は様々な調整が終了した後、安定的な均衡に落ち着くと見る。この考え方は熱力学の平衡状態あるいは力学的均衡の概念を借用したものである。ところが、経済変動の進化理論は企業も産業も社会も、平時にその動

の可能性を求めて、既に大勢の経済学者がこの方向に走り始めている。彼らは「二千年後の経済学は生物学に基礎を置くものになっていよう」というマーシャルの遺言を実現するのか。二十一世紀の進化論の進化が楽しみである。

新たな進化理論
が生きた時代の学
問的高揚感さえ感
じられる。

《評》放送大学教授 林 敏彦